

## 徒然草私記(五)

### 八 叙述の姿勢

——誰のために語るのか？

既に本考の第五節「徒然草・その生成を繞つて」を中心に論じてきたところであるが、従前の徒然草成立論（あるいは、徒然草生成論）が、現行の徒然草（流布本徒然草）をして、短期の間に逐段的に執筆された随筆であると見做している——いま少しく詳細に語ろう。「橘考」は、序段及びそれに続く二四三段が、元徳二（一一三三〇）年十一月七日から元弘元（一一三三二）年九月二十日に至る、都合三〇九日の間に執筆されたものである、とするのであり、「西尾考」は、前に書きためたもの（第三一段以前の部分を指す。が、それが何時の時点において書きためたものであるのか、西尾は明らかにしていない——註筆

### 緒方惟章

者）があり、しばらくの年代を隔ててそれに書き継がれたもの、と考えているのであつて、その書き継がれた部分は第三二段以後の部分、書き継がれた期間は「橘考」の説く執筆期間である、とするのである。「安良岡考」は、序段から第三二段に至る（第一部）が、文保三（元応元（一一三一九）年に、そして一年の隔たりを置いて、第三三段から第二四三段に至る（第二部）が、「橘考」の説く元徳二（一一三三〇）年から元弘元（一一三三二）年の間に執筆されたもの、と見ているのである——ことには、些かならぬ疑点が存するのである。

その第一点は、これもすでに述べたところであるが、「小山考」に紹介された、徒然草の原初形態をとどめるものと想定される、桃園文庫蔵藍表紙本徒然草にあつては、現行の流布本徒然草には存在する上巻三二段、下巻六段計三八段を欠くところ

から、現行の流布本徒然草が増補の段を含むものであることは明白であり、にも拘らず、その原初形態ではなく増補の跡をとどめる流布本徒然草に対してこれを逐段執筆に従う作物と見る、従前の見解は容認し難いものである、ということなのだ。

次いで、その第二点である。第一点において語った如く、徒然草の原初形態に近いものと推定される桃園文庫蔵藍表紙本徒然草に、上巻三二段・下巻六段を増補したものが現行の流布本徒然草である、と想定されるのであるが、増補の段を除去した自余の部分については、藍表紙本徒然草・流布本徒然草共に各段の排列において異なるところが無いことよりすれば、それが兼好の執筆の次第を反映するものであることは否定し得ぬところである。併しながら、問題はその先に存するのである。

「橘考」は、序段そしてそれに続く二四三の段が、元徳二年十一月七日から元弘元年九月二十日に至る、都合三〇九日の間に一気に執筆されたものであるとし、「安良岡考」は、それを、序段から第三二段に至る〈第一部〉が文保三〓元応元年に、そして一年の隔たりを置いて、第三三段から第二四三段に至る〈第二部〉が元徳二年十一月七日から元弘元年九月二十日の間に執筆されたもの、と見做しているのであるが、これは果たして容認し得るところであるか否か。

「橘考」の基本姿勢は、徒然草所収各段の内部点検を通じ、

この記事を書いたのは何年以後、逆にこの記事を書いたのは何年以前という徴証を発見し、この何年以後また何年以前という両面の証が衝突矛盾すること無くその間にある年代の間隔が残されることを以て、この著作の執筆期間を限定せんとするものであるが、橘が兼好による徒然草執筆の年代を特定するための徴証たり得るとして掲げた、一七の客観的事実なるもの（前述の如く、橘は、全書本『徒然草』の「解説」の中で、他と衝突矛盾を起こす一例を含む二五の証例を得たと記しながら、一七の証例を掲げるにとどまっているのである）は、序段を除いても、徒然草全二四三段中僅かに六・九九パーセントの低率を占めるにすぎず、しかも、その徴証として橘が掲げる最後のものは第二三八段中に含まれる記事であつて、第二三九段以後の各段中には、徒然草執筆の年代を特定し得る何らの徴証も存さぬのである。

更に言えば、その第二三八段中の「一、当代、いまだ坊におはしましし比、万里小路殿御所なりしに、堀川ノ大納言殿伺候し給（ひ）し御曹司へ、用ありて参りたりしに、論語の四・五・六の巻をくりひろげ給（ひ）て、『たゞ今御所にて、紫の朱うばふことを悪むと云（ふ）文を御覧ぜられたき事ありて、御本を御覧ずれども、御覧じ出されぬなり。なほよくひき見よと仰（せ）事にて、求（む）るなり』とおほせらるゝに、『九の巻

のそこそこの程に侍る』と申（し）たりしかば、『あな嬉し』とて、もてまゐらせ給（ひ）き。かほどの事は、児（チ）どもも常の事なれど、昔の人はいさゝかの事をも、いみじく自讃したるなり。（後略）」なる一節の、「堀川大納言殿」を、橘は「堀川具親」に擬して、具親は延元四（一三三九）年十二月二十七日に内大臣に任じられていることより、この段は延元四年以前に執筆されている、とするのである。併しながら一方、橘はその点に言及しておらぬものの、「当代、いまだ坊におはしまし比」に着目すれば、それは、後醍醐天皇の東宮時代、すなわち、徳治三（一三〇八）年九月十九日から文保二（一三一八）年二月二十六日に至る一〇年間に相当し、この段に記されている出来事は、この一〇年間のいずれかの時期に属する事柄であつたのだ。仮に、橘の所説を容認し、「堀川大納言殿」を具親に擬するならば、具親は元亨三（一三二三）年十一月三十日に権大納言に任じられていたのであつて、この後醍醐天皇の東宮時代における具親の官途は、左近衛中将から権中納言兼左衛門督にとどまるものである。徒然草の記述の基本姿勢が、「当代、いまだ坊におはしまし比」というものであるとすれば、それに続く部分も当然、「堀川大納言殿、いまだ〇〇にておはせしが、伺候し給（ひ）し御曹司へ、……」であるべきはずである。さような観点よりして、この段の執筆された年代を元弘元（一三

三一）年に特定せんとする、橘の所説には何らの論拠も無い、と言わざるを得ぬのである。

そして、ここに、「堀川大納言殿」は具親にはあらずしてその祖父Ⅱ具守である、とする「林考」が存するのである。甚だ長文に互るが、論の徹底を期し、その当該部分を引いておこう。

しかしながら、橘氏の提示された具親説はこの一条の話の示す状況にたいして、果して十分納得のゆく説明を与えるものであろうか。橘氏が主張する具親と帝との関係——東宮時代に遡らせうると仮定しても——は、単なる両者の親密度を示すに止まり、この関係からこの具体的場面での三者の交渉（三者とは、東宮・具親・兼好を指す——註筆者）、からみあいの積極的裏付け材料をとり出すことはむづかしい。また兼好がこの事実を「自讃」に値することとしてとりあげた背景についての充分の説明も、この説からはとり出しがたい。

まず、東宮の要請をうけた「堀川大納言殿」が具親であつたとすると、この五歳年下の具親が東宮の問いに直ちに応答出来なかつたことが、何故そのように恐懼すべきことであつたのか、何故、それほどまで是非とも捜し出そうとする努力がなされねばならなかつたかの説明がつかない。さらに、兼好よりは具親は十歳も年弱であることを考えると、この具親の窮境を救つたことが兼好にとって、「自讃」のたねになる

ことは、あまりに大人気ないといわねばならない。兼好は明らかにこの場合ひそかにこのことに誇りを感じたのである。

それは、具親を相手とした兼好からは導き出しにくいものはあるまいか。

# 〈中略〉

我々は名称肩書きの点で無理なく、しかもこの場の状況をうみ出すにふさわしい条件を具備した人物を、他に求めることを要請されているのではないだろうか。私はこの考えの下に、上記両点の無理を含まない人物を求めて、近來の通説にも拘らず、具親を採らず、その父(実は祖父)の堀川具守をここに宛てて考えるべきであるとするものである。

具守は、正応三年(一二九〇)の四十二歳以来、延慶三年(一二三〇)六十二歳まで二十年間、「大納言堀川具守」であつた。所謂「当代いまだ坊におはしまし、」延慶元年以降十年間における具守の経歴を見ると、所謂「堀川大納言殿」であつた時期がまず三年、次に散位となつての前大納言期が二年、還任して内大臣期が四年、そしてこの帝の登極にあふことなくして正和五年(一二三六)の一月には死を迎える(六十八歳)。具守は大納言就任前正応元年(一二八八)四十歳権大納言の時に、淳和院別当となり、後、奨学院別当を兼ね、死の前年まで、殆んど一貫してこの任にあつた。すなわち

「当代いまだ坊におはしまし、時」の十年のうちのはじめ延慶元年から同三年に至る間、堀川具守は「堀川大納言殿」であり、淳和・奨学院の別当であつた(具親の時代となつては両院の別当は北畠親房の任となる)。

立太子されたばかりとはいえ、すでに二十歳、皇太子尊治は、次の政治の中心的勢力の掌握に堪えるために、鋭意その教養に励まれた姿を、この『徒然草』の記述の蔭に想見するとしても不自然ではない。その相手として、永年にわたる皇室並びに源家の学問所の頭であるこの堀川具守が、御前に祇候し、談たまたま「紫の朱をうばふことを悪む」の句にふれ、皇太子の異常な関心が掻き立てられた。これもまたありそうなことである。その文句の検索に當つて、大納言が狼狽する類齡六十の老公卿が、意欲にもえる青年皇太子の追求にあつて、その学問所の別当の面目を保つか保たぬかの瀬戸際に立たされている時、助けの手をのべたのが兼好であつた。兼好の論語の習熟が、恩顧の庇護者の急場に、ひそかに役立って、大納言の面目は保たれた。大納言はよろこんだ。そこで兼好にとつても、やがて「自讃」となるひそかな誇りがここに生じたのではあるまいか。

〔林考〕Ⅱの章「兼好の生」2「兼好

と金沢文庫」二「具親か具守か」より〕

林の言を借りて言えば、これは「この具体的場面での三者の交渉、からみあい」また「兼好がこの事実を『自讃』に値する」としてとりあげた背景についての充分の説明」として非の打ち所の無い所説である、と言えよう。林の考究する如く、この第二三八段中の「一、当代、いまだ坊におはしまし比、……」なる記事内容に関わる「堀川大納言殿」は、既に本考の第六節「〈東〉の翳」及び第七節「若き兼好の悩み」において縷述したところによつても、また、正和六〓文保元（一三二七）年の具守一周忌に際し、兼好が延政門院一条と和歌の贈答をなしている（『家集』第六七・第六八両番歌）ことに照らしても、それが堀川具守に相当すること、そして、この記事内容の出来した時期については、延慶元（一三〇八）年十一月より延慶三（一三二〇）年十二月に至る何れかの年の某月某日のこと、と私は考える。併しながら、兼好の心に沈潜していた某月某日のその記憶が、心の表層に立ち顕れ、やがて〈自賛〉という形で徒然草の一段中に定位するに至るのは、かなり後のことと考えられる。兼好にとつては些かならず誇りを感じ得ることであるとしても、一方の当事者である堀川具守にとつては、その某日の事実が公にされることは、決して名譽なこととは言えぬのである。それゆえ、この〈自賛〉の段の執筆された時期は、具守の薨じた正和五（一三一六）年一月十九日以前とは考え難いのである。

いや、その捉え方は必ずしも適切なものとは言えぬのである。この第二三八段中に見える「堀川大納言殿」すなわち堀川具守に纏わるエピソードには、同じく〈自賛〉の性格を有するものであるにしても、第四一段における、弱冠十三歳の兼好（安良岡『徒然草全註釈』上巻の第四一段「解説」の項参照）が〈賀茂の競馬〉の場にあつて〈無常迅速〉の理を説き人々の心を捉えたと誇らしげに語る、文字どおりの〈自賛〉の段とは異なつて、第二四三段における、「八（つ）になりし年、……」と、自らの八歳の幼時における亡き父との一見たわいも無き〈仏問答〉の想い出の一齣を夢の如く浮かべしめしみと感慨に耽る、といった雰囲気にも近い、己が人生の過ぎ来し方を振り返りそこで邂逅した忘れ難き人の上に思いを馳せることにより己が心に安らぎと潤いを取り戻す、といった趣が存するのである。実は、すでにその一端については語りもし（本考の第七節「若き兼好の悩み」の項を参照されたい）、また、その詳細についてはのちに示す心算であるが、私は、徒然草の生成の事情は、枕草子におけるそれ——女房〓清少納言が近侍する中宮（のちに皇后）定子の才能教育の一助となすべく纏めた、〈歌枕〉の解説としての類纂的部分に発し、長保二（一〇〇〇）年十二月の皇后定子の崩御、それに続く主家凋落ののちに、定子との関わりを中心とした懐かしき日々を〈自賛〉を含めて綴った、日

記的・回想的な部分、更に、随筆的・随想的部分が書き継がれた、という事情——とも相似たものであろう、と考えているのである。この第二三八段の堀川具守に関わる〈自賛〉の記事は、その叙述の姿勢において、ことによれば橘の想定した執筆年代をさえ超えた後年の執筆の可能性もあろうか、と考えるものである。

次に、「安良岡考」について考えてみたい。「安良岡考」の特色をキャッチフレーズの言うならば、さしずめそれは〈橘・西尾融合発展説〉としも称すべきであろうか。すでに本考の第五節「徒然草・その生成を繞って」の第三条「安良岡の徒然草二部構成説」にあつて、一往の解説をなしたところではあるが、そこにおいて未だ語っていない点もあり、これに対する疑問と批判を能うべく簡潔に示すこととしたい。

いま、私が「安良岡考」をして〈橘・西尾融合発展説〉と称したのは、序段及び二四三段より成る徒然草をして、一七の徴証を挙げて、元徳二(一一三三〇)年十一月七日から翌元弘元(一一三三一)年九月二十日の都合三〇九日の間に執筆されたもの、と唱えた「橘考」に対して補訂を加え、「最初の約三十段に互つては悲哀感としての無常観が、以下の諸段は悉く実相観としての無常観が根本規定を成してゐる……」とした、師「西尾実の立場を継承・発展せしめ、間に筆執らざる一一年の空白を想

定して、「(一) 文保三年「元応元年(一一三一九)に、序段から第三二段までの第一部がまず執筆された。兼好は、おそらく四十歳以前であつたと思われる。そして、この第一部の草稿は、そのまま、彼の手もとに保存されていたらしい。」という見通しを持ち込みながらも、その一方、大枠においては橘の説くところに従い、「(二) それから十一年後の元徳二年(一一三三〇)から翌年にかけて、第三三段から終わりまでの第二部が書かれた。それは、元弘の乱(一一三三一)勃発の直前のことであるので、この乱を機として拡大されていった、南北朝期の内乱には、何ら触れていないのが当然のこととなる。」とすることによる。さて、「その後しばらくして、先の第一部とこの第二部とが一つにまとめられ、しかも、上下二巻に編成されたようである〔第一〇三段を重視すると、建武三年(一一三三六)以後のこととなる〕。その時に、第二部の中に、いくつかの段が補入されたか、あるいは語句の補訂があつたらしい。第一〇三段がその一つであつたと思われるし、ほかにもまだあつたかも知れない。」と、安良岡は言い添えるのであるが、ここに見る安良岡の立場は、さしずめ、二期に互る〈短期逐段執筆説〉とでも称すべきものであろう。

この立場に対する疑問及び批判は、すでに些か本考第五節「徒然草・その生成を繞って」の第三条「安良岡の徒然草二部

構成説」中に示したところであるので、そこで比較的詳細に論じた点についてはその骨子のみを示し、詳細に論じることを得なかった点のみ、少しく丁寧にここに語っておこうと思う。

「安良岡考」に対する疑念及び批判の第一点は（これは、「西尾考」にも通じて言えることであるのだが）、安良岡が、序段から第三二段に至る、安良岡言うところの〈第一部徒然草〉は文保三〓元応元（一三一九）年に執筆され、その後一一年間、及び筆執らざる空白の期間を隔てて、元徳二（一三三〇）年十一月七日から翌元弘元（一三三一）年九月二十日に至る三〇九日の間に、第三三段より第二四三段に至る二一〇有余段より成る、〈第二部徒然草〉がこれに書き継がれて、現行の徒然草の成立を見た、としている点である。安良岡は、第三二段を記したのちに兼好は何ゆえに筆を擱くことになったのかについても、また、一一年の空白期を隔てて、<sup>アツカ</sup>恰も物に取り憑かれたが如く、兼好は何ゆえに一年足らずの間に二一〇有余の段を書き綴る心境に立ち至ったのかについても、何らの解釈をも施しておらぬのである。西尾の所説を承け、安良岡もまた、この空白の一一年を隔てて、兼好の無常観に一大進展が見られる、との立場にあるだけに、これは不可解としか言いようがないのである。批判及び疑念の第二点は、安良岡が、〈序段〉を彼の言うところの〈第一部徒然草〉の中に含めていることに対してである。

〈第一部徒然草〉にやがて〈第二部徒然草〉が書き継がれ、その後暫くして上・下二巻より成る徒然草に編成されたもの、と安良岡は語るのが、曾て第三二段より成る〈第一部徒然草〉の〈序〉として草しておいたそれを、いま、上・下二巻の装いも新たに完成しつつある全二四三段より成る徒然草のその〈序段〉としてさながら流用する、などということが果たしてあり得べきものであるか否か、それを考えてみる必要がある。

批判及び疑念の第三点は、批判及び疑念の第一点の内容にも関わるところであるが、第三三段より第二四三段に至る〈第二部徒然草〉は一年足らずの期間に逐段的に一氣に執筆されたもの、と安良岡が考えている、まさしくその点についてである。一氣に書き継がれた二一〇段余が、しばらくののちに、上・下二巻に再構成されねばならなかったその理由はどこに存したのか、という疑点に関してである。とりわけ、その上巻にあつて、無常観の本質において異質なる両部——第一段より第三二段に至る部分と、第三三段より第一三六段に至る部分と——が一体化するその理由はどこに存したのか、という疑点に関してである。

批判と疑念の第四点は以下の如きものである。この点については、本考第五節「徒然草・その生成を繞つて」の第三條「安良岡の徒然草二部構成説」にあつても未だ論じていない内容で

あるので、些か詳細にこれを語ることにはしたい。その批判及び疑念とは、安良岡が徒然草成立（生成と言うべきか）年代特定の根拠として掲げる客観的事実の内容それ自体に対する疑念であり、その客観的事実の存在を以て真実徒然草の生成年代を特定し得るのかという、方法論そのものに対する根本的な疑念である。

これを、増補の段を含まず、均しく詠嘆的無常觀の枠内にとどまる、「安良岡考」が（第一部徒然草）と称する、第一段より第三二段の範囲に限定して検することにしよう。安良岡は（第一部徒然草）が文保三〓元応元（一二三九）年に成立したことの証左として1～8の客観的事実なるものを掲げている（この部分、本考第五節「徒然草・その生成を繞って」の第三条「安良岡の徒然草第二部構成説」を参照されたい）のである。この中、安良岡の言説に妥当性を認め得る、第一段に関わる4、第二段に関わる5、第二七段に関わる2、第二八段に関わる3、以外の四項については、以下の如き問題が存するのである。

1 「第二五段に、法成寺の金堂の倒壊の記述があるが、これは、『その後、倒れ伏したるまゝにて、とり立つるわざもなし』とあるので、再建の可能性が存していた、文保元年（一二三九）以後の数年間に書かれたものと推定される。」については、この段が安良岡の説くが如く、文保三年に書かれた可能性

をも含むものの、また、金堂倒壊が文保元年の八月五日のことであり、「その後、倒れ伏したるまゝにて……」の文脈よりして、文保元年の末の頃あるいは文保二年に書かれた可能性も否定し難いところである。要するに、金堂倒壊に関わる記述内容にしても自余の記述内容にしても、この段が文保三〓元応元年に執筆されたことを特定する如何なる徴証をも含んでいないということなのだ。

8 「第二四段の『齋宮の野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事の限りとは覚えしか』とある回想は、元応元年の三月（実は、元応への改元は四月二十八日のことであるので、三月は未だ文保三年と称すべきであろう——註筆者）にかつて齋宮であられた奨子内親王が後醍醐天皇の皇后に立たれた事実によつて触発されたものと思われる。」についても同様である。安良岡は、奨子内親王が齋宮となるに先立ち潔斎のため嵯峨の（野宮）に籠もられた（『女院小伝』を見ると、内親王は徳治元（一二三〇）年伊勢齋宮に選定され、嵯峨の野宮に籠られたが、兄君たる後二条天皇の崩御により、徳治三（一二三八）年八月、伊勢神宮に向かわれることなく、京極殿に退下された）当時を回想するためには、文保三〓元応元（一二三九）年三月の奨子内親王立后という契機が必要であつた、と説いているのであるが、些か付会の嫌いがある。奨子内親王に



関わる回想がこの段の中心的な主題であるというにしては、この段のそれに続く展開、すなわち、「『経』・『仏』」など忌みて、『なかご』、『染紙』などいふなるをかし。また、「すべて神の杜こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもたゞならぬに、玉垣しわたして、榊に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布祢・吉田・大原野・松尾・梅宮。」は、いかにも不自然と言わざるを得ぬのである。この段の本質は、寧ろ、〈有職〉に纏わる興味、枕草子の類纂的部分にも相似た執筆の動機である、と見たい。詮ずる所、この段の記述内容のいかなる部分にも、この段の執筆年代が文保三＝元応元年であると特定し得る徴証を見出すことは出来ぬのである。

6の項にあつて、安良岡は、「第七段に、『四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ』とあるのは、到底、四十歳を越えた人間の口吻とは思われない。通説の元弘六年生まれとして兼好の年齢を計算すると、この元応元年は三十七歳となつてはば適當であるのに対し、元徳二年では四十八歳となつてしまふのである。」と説いて、それが〈第一部徒然草〉執筆の時期を文保三＝元応元年と特定するための徴証たり得る、とするのである。これは、奇妙な発言である。「四十に足らぬほ

どにて死なんこそ、めやすかるべけれ」という兼好の表明について、「到底、四十歳を超えた人間の口吻とは思われない。」とするのは、正しく妥当な見解であるものの、とは言え、この兼好の表明から読み取れるところは、この段の執筆された時点に兼好が〈老年〉への入り口たる四十歳を稍彼方に望み見ることを得た、さような年齢に身を置いていた、ということのみであり、その年齢を三十七歳と特定し得る——換言すれば、この段が文保三＝元応元年に執筆されたと特定し得る、ということにもなるのであるが——、何らの徴証も存在しないのである。にも拘らず、安良岡は語るのである、「この元応元年は三十七歳となつてはば適當である……」と。不可解の一語に尽きる。そもそも、安良岡の目指すところは、その段の執筆年代を特定し得る客観的事実の検証を重ねることを通して、徒然草の成立年代を元徳二（一三三〇）年十一月七日から元弘元（一三三一）年九月二十日に至る三〇九日の間とした「橘考」の所説を、その大枠においては容認しつつも、他方、「最初の約三十段に互つては（のちに、西尾は三一段迄とするのである——註筆者）悲哀感としての無常観が、以下の諸段は悉く実相観としての無常観がその根本規定をなしてゐる」という、師＝西尾実の言説のこれまた否定すべからざるものであることを確認するところから、そこに徒然草は第三一段迄とそれ以後と二期に分かれて

それぞれ執筆されたものではないかとの仮説を立て、第三一段以前の段中の記述内容から執筆年代を特定し得る客観的事実を発見し、その検証を通して、第三一段以前(安良岡は、検証の結果それは三二段以前とすべきである、との結論に至るのであるが)の執筆時期が何年に当たるのか、それを特定することであつた筈である。然るに、安良岡は、その執筆年代を特定する何らの徴証をも有さぬこの第七段に対して、「この元応元年は……」と、恰もそれが自明のことであるかの如く語るのである。一体これはどうしたことであるのか。

7の項について。安良岡は、「第一四段に、『この比ヒの歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれに、けしき覚ゆるはなし』とあるのは、京極派の歌風が為兼を中心として盛んであつたことに対する、二条派の歌人兼好の批判と考えられる。」とし、そのことをして〈第一部徒然草〉の元応元(一二三一九)年成立説の根拠の一としているのであるが、この点果たして如何なものであろうか。

安良岡の『徒然草全註釈』上巻の第一四段「解説」の項に引かれている「了俊歌学書」<sup>註一</sup>の一節に、「……其世にも、為世卿の門弟等の中には、四天王とか云て、……其四天王は、淨弁・頓阿・能与(能督とも——註筆者)・兼好等也。」と見える如く、

兼好が二条為世に師事し、二条派の中心的な歌人としての位置を占める存在であつたことは、何ら疑いを容れぬところである。問題となるのは、同じ「解説」の中で、安良岡が、「それならば、この一節は、いかなる事実についての批判であろうか。わたくしは、『この比ヒ』に、元応元年(一二三一九——註筆者)以前の数年を含ませることによって、花園天皇の御代(徳治三(一二三〇八)年—文保元(一二三二七)年——註筆者)に興隆した、為兼を中心とする京極派の歌風を評したものと解したい。為兼の土佐に流されたのは、正和四年(一二三二五)のことであるが、その歌風は、花園天皇を中心として存続し、容易に断絶するはずのものではなかった。……」と語る部分である。

さて、〈京極派〉について語るといふことは、取りも直さず、京極為兼について語るといふことに外ならない。為兼は、西園寺実兼に仕え、その擁立した春宮(伏見院)に近侍して、伏見院の踐祚センと共に、政治的歌壇的に活躍するところとなる。永仁四(一二九六)年、〈政道口入〉の廉カドで失脚、永仁六(一二九八)年、佐渡配流となる。乾元二(一二三〇三)年、赦されて帰洛し、再び政界・歌壇で活躍するところとなる。徳治三(一二三〇八)年、花園天皇の乳父として、權威を振るう。正和元(一二三二二)年、『玉葉集』を独撰する。正和二(一二三三三)年伏見上皇出家、為兼も出家。正和四(一二三二五)年、春日社参詣

の折に、公卿や殿上人を従えて恰も法皇の如き振舞いを為兼がなしたことから、西園寺実兼の忌諱するところとなり、土佐国に配流される。文保元（一一三一七）年、幕府が、持明院・大覚寺の両統の迭立を朝廷に提案。同年、伏見法皇の崩御に伴い、持明院統逼塞する。文保二（一一三八）年、大覚寺統の後醍醐天皇踐祚、後宇多上皇院政を行う。元応二（一一三二〇）年、後宇多上皇の命による『続千載集』を二条為世撰進する。

京極為兼の人生、及びその周辺の状況の推移をこのように辿ってみるとき、安良岡は、「為兼の土佐に流されたのは、正和四年（一一三一一）のことであるが、その歌風は、花園天皇を中心として存続し、容易に断絶するはずのものではなかった。」とするものの、〈京極派〉の黄金時代は、やはり為兼による『玉葉集』独撰の頃迄と見るべく、正和四年の為兼土佐配流、文保元年の伏見院崩御によって、〈京極派〉は急速にまた決定的にその力を失ったもの、とすべきであろう。二条為世による『続千載集』の撰進は元応二（一一三二〇）年のことであるとしても、後宇多院によるその撰集の宣下は文保二（一一三八）年の事であり、言うならば〈京極派〉の歌風が一世を風靡していることに対する批判を顕にする、などということが考えられるであろうか。兼好の為世に師事した時期が何時のことであるか、定かではないが、〈二条派〉を庇護する大覚寺統の末端に繋がり、

徳治三（一一三〇八）年、後二条天皇の崩御に際しては、御母西華門院の帝供養に、「うちとけてまどろむとしもなき物をあふとみつるやうつ、なるらん」の詠（『家集・第五七番歌』）を奉っている兼好であれば、かなり早くから〈二条派〉との関わりの存したことも予想され、諸々の点よりして、この徒然草第四段中に見える、〈京極派〉の歌風の批判とも見える一条が、文保三＝元応元（一一三一九）年に執筆されたことの徴証となるものとは考え難いのである。

かように、「橘考」そして「安良岡考」の〈徒然草成立年代説〉に対する批判及び疑念を展開し来って、私は、いよいよ不可解の念を募らせるのである。ここでは特に取り上げて批判の対象とすることの無かった、「西尾考」も含めて、従前諸家にあつては、何ゆえに一片の疑念を抱くことも無く、徒然草をして逐段に執筆された随筆であると、のみならず、短期間に執筆された随筆であると（安良岡により〈第一部徒然草〉と名づけられた部分の執筆につき、西尾は、「創造をたくましくすると、前に書きためたものがあつて、それにしばらくの年代をへだてて書き継いだものではないかと考えられる。」としているのであり、〈第一部徒然草〉の形成には些かの時日を要したか、とする立場に立つものである。また、安良岡の説くところは、

《第一部徒然草》と《第二部徒然草》とが、一一年の空白期を隔てて、それぞれ短期の間に執筆されたかとする、二期に分かれた短期執筆説としても称すべきものである、考えたのであるうか。私は、そこに、徒然草の序段並びに第一九段の一節の意味するところを指摘しておきたい、と思うのである。

諸家は、徒然草序段中の、「(つれづれなるまゝに)、日暮らし、硯にむかひて、(心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく)書(き)つくれば、……」の、黒圈点部から、徒然草を執筆する兼好の集中・没頭の姿を、すなわち短期執筆説を想到し、また、徒然草序段中の、「心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書(き)つく」及び、第一九段中の、「言ひつゝくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらに言はじともあらず。おほしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かつ破りすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。」の、黒圈点部から、徒然草がまさしく心の趣くままに書き綴られた随筆であると想到するに至ったものではなかったのか。

本考の第二節「心の遠近法」の中で、私は、小林秀雄の「徒然草」(『無常といふ事』所収)の一節を引きつつ語った。

前掲の「徒然草」の論にあつて、小林は次の如くに語る、  
「徒然なる儘に、日ぐらし、硯に向ひて、心に映り行く

よしなしことを、そこはかと無く書きつくれば、怪しうこそ物狂ほしけれ」。徒然草の名は、この有名な書き出しから、後人の思ひ付いたものとするのが通説だが、どうも思ひ付きはうま過ぎた様である。兼好の苦がい心が洒落た名前の後に隠れた。一片の洒落もずる分いろいろなもの隠す。一枚の木の葉も、月を隠すに足りる様なものか。

と――。小林のいうところの兼好の最大の《洒落》――対象の本質に触れんがための《心の遠近法》に誤り無きか否かを測るリトマス試験紙の如きもの、それが兼好の《苦がい心》・《辛辣な意味》をその背後に隠した《徒然》なる言葉自体であつたことは言う迄も無いが、その伏線として仕掛けられた兼好の企みが、「おほしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かつ破りすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。」(徒然草・第一九段より)の中に存したことを、私は、ここに指摘しておきたい。――。小林の言うところの兼好の《洒落》・私の言うところの兼好の企み、それはまた、次に掲げるものの中にも仕組まれていた、と言えようか。三卷本枕草子跋文の一節である。

この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見んとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、……ただ心ひとつに、おのづから思ふ事を、たはぶれに書きつけたれ

ば……。

読者諸氏は、果たして、この三巻本枕草子跋文の一節の黒圈点部——「つれづれなる里居のほどに書き集めたる」及び「ただ心ひとつに、おのづから思ふ事を、たはぶれに書きつけたれば」と、徒然草〈序段〉の一節「徒然なる儘に、……書きつくれば」・「心に映り行くよしなしごとを、そこはかと無く書きつくれば」及び第一九段の一節「筆にまかせつゝ、あぢきなきさびにて、かつ破りすつべきものなれば」との相似た内容を、単なる偶契に過ぎぬ、と言ひ切れるであらうか。

さて、西尾実氏は、『徒然草』（昭和十五（一九四〇）年、日本評論社刊〈日本古典読本Ⅶ〉）の中で、徒然草の各段を、まず、それぞれの表現形態において把握し、次いで、それぞれの鑑賞を主題・構想・叙述という諸点から企てているのである。甚だ長文に互るが、論の徹底のため、その主要な箇所を次に掲げることとしたい。まず、その第一章「解釈の問題」の一「表現形態と解釈」から、

文芸形態の考察に於て、わが国の学界に最も多くの影響を与へたのはモウルトンの著であるが、そのモウルトンに従へば、文芸の形態分類の基本をなすものは、創造文芸としての「詩」と、存在文芸としての「散文」とを両極とする南北軸

と、作者が対象と読者との間に介在する「記述」と、作者が対象に没入して対象が直接読者の前に提示せられてゐる「描出」とを両極とする東西軸とであつて、あらゆる文芸作品はこの二軸によつて六つの形態——叙事・叙情・戯曲の詩形態と、歴史・哲学・雄弁の散文形態——に分類せられてゐる。そして、われわれのいふ随筆はモウルトンのいふ「哲学」に相当し、南北軸に於ては「散文」に属し、東西軸に於ては「記述」と「描出」との中間を占める線上にあつて、モウルトンはこれに「自照」reflectionなる名称を与へてゐる。今、この「自照」を「記述」と「描出」との関連の面に於て解すると、これは「我」が「我」を「我」に提示する意味に於て、作者も対象も読者も我に帰一するのがその本来の姿である。この意味に於て、「記述」を三人称的表現、「描出」を二人称的表現とするならば、「自照」は一人称的表現と呼ぶことも可能である。何れにしても、自照は、作者の自己集中を第一の特質とし、わけでも「散文」としての随筆は、叙情詩が外化的表出的方向をとるのに対して、内観的反省的方向をとる表現であるのを第二の特質とする。

と、〈随筆〉なる文芸形態の特質について概括した上で、徒然草に焦点を絞り込んで、西尾は、

徒然草について見ても、一作品としてはそれが自照文芸と

しての形式を具へてゐるにしても、一段一段の特質からいふと、ある段は「記述」から成り、ある段は「表出」であり、又ある段は内観的表現であるといふ如き形態的变化が指摘せられる。しかし、これをその著しい特質に於ていへば、作者の感想が感想として表出せられ、又は内観的に表現せられてゐる自照形態そのものと、作者の観察が観察として叙事せられてゐる記述形態・描出形態の二つであるといつてよい。

と語るのである。そして、西尾は、その前者に対して感想形態、その後者に叙事形態の称を与え、

#### 一 感想形態

##### (一) 観照的感想型

##### (二) 論證的感想型

#### 二 叙事形態

##### (一) 記録型

##### (二) 考證型

##### (三) 描写型

##### (四) 描出型

の種目の下に、序段を除く徒然草全三四三段を分類しているのである。因みに、徒然草第一段は、一―(二)に、第三段は、一―(二)に、それぞれ分類されている。

次いで、その第一章「解釈の問題」の二「解釈の方法」にお

いて、西尾は、

私は、読みによつて得た主體的把握を客観的知識に展開させる解釈の方法体系を主題・構想・叙述の探究に見出し、主題とは表現に即して見出される示現せんとしてゐるものであり、構想とは主題展開の作用関連であり、叙述とは主題展開の究極面であつて、主題の結晶としての一語、一句、一句読、一箇文であるとする。

と、解釈の方法体系を示すのである。

上記の如き、表現形態の分類、解釈の方法体系に則してなされた、具体的な解釈の一例を、次に示しておこう。第一段に關するものである。

##### (一) 論證的感想

#### 第一段

主題 さまざまな人間の願望の対象とその批判。

構想

##### (一) 人間の願望の対象。

##### (二) 願望の対象の分析とその批判。

##### (1) 社会的地位の分析とその批判。

##### (イ) 皇位・皇族―願望を超越した神聖なる存在。

##### (ロ) 摂家及び舍人など賜はる地位―肯定

##### (ハ) それ以下の地位―否定。

(三) 法師の地位——否定。

(付) 真の世捨人——却つて肯定。

(2) 個人的資質の分析とその批判。

(イ) 容貌・風彩——肯定から否定へ。

(ロ) 心性——肯定から否定へ。

(ハ) 教養——肯定。

(二) に於ては感想として掲げ、(三) に至つてそれを分析し批判してゐる点に於て、論證的である。

#### 〈中略〉

#### 叙述

〔いでやこの世にうまれては、ねがはしかるべき事こそおほかめれ。〕——先づ、感想表現の形で問題を提出したのである。

〔御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。〕——「御門の御位」には、次に来る「竹の園生の末葉まで」の「まで」と照応して、「申すまでもなく」といふ文勢がある。「いともかしこし。」と簡勁に断じた文致にも、次の個文では、「人間の種ならぬぞやんごとなき。」と叙してゐると同じ意向が、未展開のままに籠つてゐることが感銘せられる。

〔一の人の御有様はさらなり、たゞ人も、舍人など給はるき

ははゆゝしと見ゆ。其の子孫<sup>ウマゴ</sup>までは、はふれにたれど、なほなまめかし。〕——一の人とただ人に関する叙述には、「御門の御位」と「竹の園生の末葉」とに関する叙述と同じく、前者については「いふもさらなり」と含蓄的にいひ、後者については「……ゆゝしと見ゆ。……なほなまめかし。」と展開的に叙して、対句的反復の中に、変化と発展を与へてゐる。

〔それよりしもつかたは、ほどにつけつゝ、時にあひ、したりがほなるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。〕——今まで誠実に考へ、素直に肯定して来た態度から急展開して、「ほどにつけつゝ、時にあひ、したりがほなるも、」とその弱点を遺憾なく抉り出した上に、「みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。」と余すところなく否定し去つてゐる。

〔法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。〕——唯、否定に出發してゐることが變つてゐるだけで、文の起し方は、「御門の御位はいともかしこし。」や「一の人の御有様はさらなり。」と同一筆法であることが注目せられる。以下にそれを展開させてゐるさせ方も目覚ましい。

〔ひたぶるの世すて人は、なか／＼あらまほしきかたもありなん。〕——前節は肯定から否定への急展開であつたが、こ

れは否定から肯定への急展開である。しかし、その肯定は余談的除外例的に位置づけられてゐるので、中心の意義が否定にあることはいふまでもない。

「人は、かたち有様の云々」——肯定に出發して否定に到達してゐること、しかも、その肯定が心ゆくばかり深く、その否定がなかなか辛辣であること、前節と同じである。容貌・風采の批判から心性問題を提示し来つたところに眼目があるのであらう。

「しななたちこそ生まれつきたため、心はなか云々」——筆法すべて前の諸説と同一である。唯、批評の基準が価値如何よりも可能如何を主としてゐる点が注目せられると共に、心性批判から才即ち教養を導き出して来たところに、問題の発展が跡づけられる。

「ありたき事は、云々」——結びの一節を置くべく、いかにも落着いた起し方である。その「ありたき事」が、如何なる立場の人に於てのそれであるか、前の諸節で指示せられてゐるところを見逃してはならないと思ふ。

西尾が徒然草各段についてなした数多の解釈例の中から、第一段に対してなされたそれを、僅かに一例引いたに過ぎぬのであるが、その構想の大きさ、分析の緻密さには感服すること頻

りなるものがあるのである。

併しながら、唐突に、私の心に、小林秀雄「私の人生観」(昭和二十三(一九四八)年、大阪の新日本新聞社主催の講演会記録に基づく)中の次なる一節が浮かんだのである。

アランが、或る著名な歴史家の書いたトルストイ伝を論じたものを、いつか読みまして、今でもよく覚えておりますが、ほかかういふ意味の事を書いてゐた。こゝに書かれた事柄は、一つ一つ取り上げてみれば、どれも疑ひ様のない事実である。ところが全体としてみると、どうしてかう嘘らしい臭ひがして来るか。三途の川をうろついてゐる様なトルストイが現れるか。いや、確かにアランは、三途の川と書いておりました。何故、確かな事実を描いた筈なのに影しか描けてをらぬのか。私の心の中でこの一節の波紋が果てし無く広がっていく。西尾の解釈には何かが足りない。何かが欠けているのだ、と——。やがて、私は、得心する。西尾の解釈に欠けているもの、それは、徒然草の各段を書き綴っていく兼好の姿勢——誰のために、何のために、兼好は徒然草を書き綴っていくのか、——それが見えてこぬ、ということであつたのだ。

橘は、全書本『徒然草』の「解説」の中で、「一人の著者により、世間の人に読ませるといふ著作心理を以て、逐段に書かれていった普通の作品」として、徒然草を規定していた。そし



て、西尾は、先程来それを引いているところの、日本古典読本Ⅶ『徒然草』の中で、『我』が『我』を『我』に提示する意味に於て、作者も対象も読者も我に帰一する」ところの〈随筆〉として、徒然草を規定してるのである。果たして、それで良いのだろうか。

私には、この第一段にあつて、兼好が、「たゞ人も、舍人など給はるきははゆ、しと見ゆ。」と語り、あえて〈法師〉を取り上げ、清少納言の枕草子を引き合いに出し、「法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。『人には木の端のやうに思はるゝよ』と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。」と語り、更に、「ありたき事は、まことしき文の道（本格的な、政治や道德のための学問）、作文（漢詩を作ること）、和歌、管弦の道、また

有職（朝廷の官職・制度・服飾・殿舎などに関する知識）に公事の方（朝廷の儀式の方面）、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。」と語る、その叙述の姿勢を看過することは許されぬことである、と思われるのである。

誰のために、何のために、兼好がこの第一段を書き綴っているのか、それを見究めるために、私は、本考の第七節「若き兼好の悩み」に記した、十七歳の悩める兼好のその後を追ってみる必要があるそうである。

（続）

註一 未刊国文資料（伊地知鉄男編著『今川了俊歌学書と研究』にその翻刻が収められている。

（人文学部日本文学科教授）